

平成25年1月14日（月・祝）

記録・文責 土 井

平成24年度第6回教師力アップセミナー

「このときの主人公の気持ちは？」これでいいのか、国語の授業

～論理的思考ができる子どもを育てる～

筑波大学附属小学校 白石 範孝 先生

### 【はじめに】

三連休最後、足下の悪い中、こんなにたくさんの先生が時間を割いてお金を出して学ぼうという熱気を感じる。何かを得て帰ろうという先生が多く嬉しく思う反面、国語の授業に悩んでいて、何とかしたいが何をしてよいのか分からない人が多いのではないかな。

新たに、単元を貫く言語活動が始まった。しかし、活動をすることが言語活動ではない。子どもが言葉を使って論理的に思考し、コミュニケーションを図るのが言語活動である。

### 【これまでの国語の授業は】

国語は、論理的だ。論理的な文章を論理的に読むのは当たり前であり、算数と同じだ。

今までの国語の授業は、「**イメージと感覚**」だけの授業。発問は決まっているから、教材研究する必要がない。場面に分けて、「このときの〇〇の気持ちはどんな気持ち？」と発問する。そして、「それはいいわね」と全て容認する。どの物語も、どの学年でも同じ流れなので、別に教材研究をしなくても授業ができる。

そういった授業に対して、今日集まったみなさんは疑問に思っている。この問題は日本の国語教育には昔からある。

もう一つが、「**確認となぞる**」だけの授業。説明文に多く、順番に、「誰がどうしましたか」、「なぜそうしましたか」を答える。書かれている答えをさがして読むだけで単調になる。

もう一つが、「**活動主義**」の授業。必ず発表会をする。物作りをする。そしてペープサート(笑)。

このような活動主義はどこからきたか。昭和63年から、「聞く・話す」が出てきたとたんに、目新しい活動が行われるようになった。生活科か国語科か分からなくなった。説明文をやったら「〇〇図鑑を作ろう」。全国どこでも行われているのが「大きなカブ」の動作化の発表会(笑)。それを授業参観で親に見せる。こんな活動は、活動あって学びなし。そこから脱却しなくてはならない。

そして、もうひとつ、「**記憶中心**」の授業。たとえば漢字は「絶対に覚えなさい」、俳句・短歌は「覚えて暗唱大会をしよう」。やることに困ると、暗唱させ、発表会をさせようとする。

ここにどういう国語の力があるのか見えてこない。

### 【「考える」という思考活動】

これらの全ては否定しない。これだけの授業をやってしまうから、国語の学力が見えないのだ。ここに見えないのが何か。他教科と比べて、国語の授業像にないのが、子どもの「考

える」という思考活動である。

他教科は、考えようとする。しかし、国語は考えなくても済む。何を言っても容認される。

そうではなく、「私はなぜこの作品からこういうイメージをもったのだろう」と「考える」活動を入れれば論理的になる。「〇〇の気持ち」を考えなくて済む。

では、考えるために何が必要か、何を指導するか。

### 【3つの習得・活用】

ひとつめは「用語を習得・活用」する。

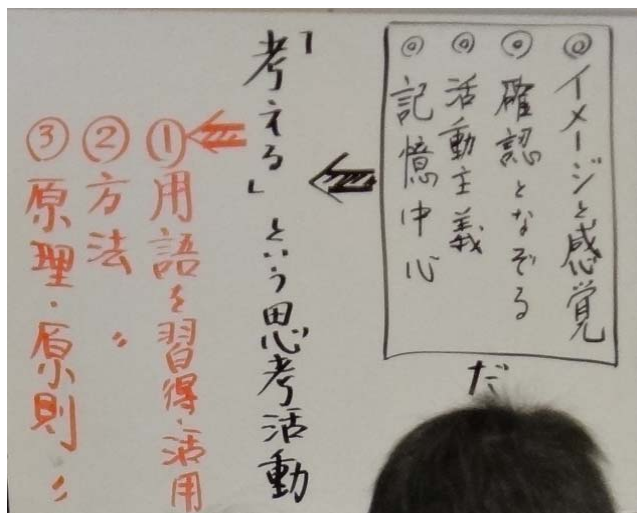
当たり前と思うかもしれないが、あまり理解されていない。「要点を求めなさい」というが、「要点」と「要約」、「要旨」、全て区別できますか？

区別して与えないで、「要点をまとめなさい」と問えば、結果としていろんなものが出てくる。そこでまとまらないので、「指導書にこう書いてあったから」と出してしまう(笑)。だから、子どもには腑に落ちない。

2つめは方法を習得・活用する。要点をまとめる方法を知っていたら収束する。算数と同じだ。

3つめには、原理・原則を習得・活用する。

これらを身につける、活用して考える活動をしていかななくてはならない。



### 【部首の基礎・基本】

Q 「問」「聞」「聞」の部首は何？

A 「もんがまえ」

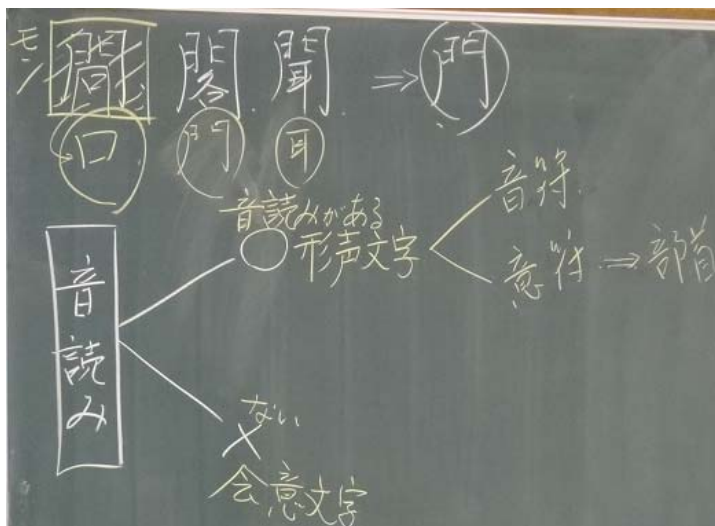
そう、「もんがまえ」と答える。「どうしてももんがまえになるのですか？」と問うと、「だってもんがまえだもん」になる(笑)。

今までに「もんがまえ」を学習しているが、原理・原則を教わってこなかった。

これは、「口」「門」「耳」が部首である(驚)。

国語の力として、他へ転移できる力が必要だ。他に使えなければ基礎・基本といえない。その場限りではなく、他の作品にも生きる力を付けなくてはならない。

漢字を見たら、まず音読みをする。音読みがある漢字が「形声文字」、音読みがない漢字を「会意文字」という。



形成文字がさらに二つに分かれる。音読みする部分を「音符」、残った方を「意符」という。その意符の部分が部首になる。

これを知っていたらどの漢字にも適用できる。

5年生か6年生の漢字の学習で、「……を形声文字という」とただ意味が書いてあるだけだ。しかし、こうして教えれば、これが形声文字、これが会意文字だと区別できる。

そして、会意文字は、「指事文字」と、「象形文字」が組合わさってできたものだ。指事文字・象形文字は、小学校1，2年生で習う漢字だ。

「解」、これは、象形文字と指事文字が合わさってできたもの。

「牛」の「角」を「刀」で切る。

これで、目的になるのもの＝「角」が部首になる。

こういう原理・原則を知っていたら、他の漢字でも部首がわかる。

### 【凹凸の書き順は？】

凹凸 何と読む？

「でこぼこ」「オウトツ」、音読み・訓読みがあるから漢字である。何画で書くか？書き順は？ やってみて、隣の人と相談してほしい。

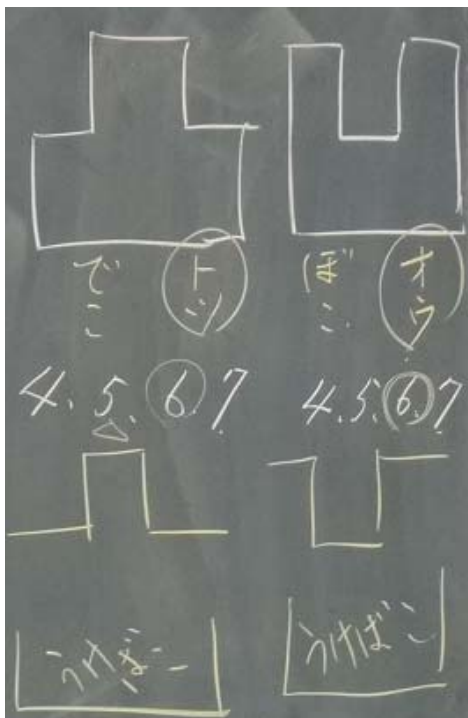
Q 何画だと思うか手を挙げて？

凸は6画が多い。凹も6画が多い。一番多いのに決めましょう、というわけにはいかない(笑)。

最初に言ったように、イメージと感覚ではなく、書き順の決まりを覚えたら見えてくる。漢字は2つに分けてみよう。

凸は出っ張り。上下に分かれ、部首は下の「うけばこ」で「画」と同じだ。

凹はひっこみ。やはり分かれて下が「うけばこ」。



こうすると、書き順が自分で考えられるようになってくる。

書き順のルールは8つあるが基本は2つ。「上から下へ」、「左から右へ」、これを使えば解ける。

1箇所、迷うところが出てくる。凸の3画目を1画で書くか、2画で書くか。このときに出すのが「九」の部首「乙」による。1画で書くのである。

あとは、4、5と、「うけばこ」を書く。同様に凸は5画。ルールに乗っかっていけば論理的に導き出せる。

授業で、漢字の指導にどれぐらい時間を割くか？新出漢字が10数個もあると、漢字だけで1時間が終わってしまう。

そこで、「漢字を2つに分けてごらん。どこから書くか」と問えばよい。

子どもたちが考えて、変だよというのが出てくる。

例えば、「しんにょう」。「しんにょうは、右から左へと書くんだよ。」と教えてあげればよい。「えんにょう」も同じ。こうして、8つの書き順のきまりの中から教えられるようになってくる。最初から全部を教えようとしたらだめ。すべてが原理・原則から教える。

### 【詩を読む論理 1】

文学の中でも、説明文でも、詩の中でも論理がある。たとえばこんな詩がある。

( )  
 ひとくいぎめのむしば  
 きゅうけつきのにんにく  
 しよんべんこぞうのへそ  
 おねしょしてしかられた  
 かぜこぞうひぎこぞう  
 ライオンとにらめっこ  
 とうさんのでかいくつ  
 うちゅうじんとじゃんけん  
 カバはばかのはんたい  
 ( )



有名な、川崎 洋 の詩だ。題名も十行目も隠れている。

今、指を折り数えている人は、詩を見たらどこから入ると知っている人。これが詩を読む始まりだ。

詩はリズムでできている。このリズムは、音数でできてる。

「七五調」「五七調」の技法と効果が分かっているか？技法は知っているが、技法の効果を知らない人が多い。

「七五調」：明るく楽しくリズムカルで元気  
 「五七調」：暗くて重くて重厚

これだけ知っていたら特徴が分かる。そうすると、何をどう授業しようかになる。

この詩の題名は「スピード数え歌」。最後は、「これでひゃくかぞえたよ」。これを授業にするときは、子どもがどこでつまづくか考える。

「全部10なんだ。音数－文字数、どれも10文字でできているよ」と言う。そうすると、「きゅうけつきのにんにく」は11文字になると言う子がでてくる。ここで、「これは音数というんだよ、たたきながらやってみなさい。音数と文字数は違うよ」と指導すればよい。

「ライオンとにらめっこ」の「にらめっこ」は「っ」も一つとして数える。促音は独立して数える。こうして、拗音と促音の違いを教える。用語も教える。

「10音が10行あるから、100数えたよ」に落ち着く。

授業を考える時、私は、いつも最後の行を隠す。

これで

四角の中にはどんな言葉が入るのか？と問う。詩の中の論理を使って「ひやくかぞえたよ」と解を導き出す。イメージと感覚だけでは崩れる。

詩の学習でも、教材研究で何に注目するのが重要。

教材研究をするときの観点は、資料4ページを見てほしい。

**詩を読む5の観点： 題名 リズム 中心語・文 語り手 技法と効果**

作品を見たときに、体言止め、リフレインが使われているのは分かるが、何のためにかがわからない。「七五調」「五七調」を知っていても、明るさ・暗さの効果を知らない。それは、技法と効果が一体となっていないからである。

北原白秋の「落葉松（からまつ）」は五七調。重々しさを出している。

からまつを林を過ぎて、  
からまつをしみじみと見き。  
からまつはさびしかりけり。  
たびゆくはさびしかりけり。(以下略)

「五七調」の効果が分かれば、何を読めばよいかが見えてくる。

**【詩の論理を生かした言語活動】**

「スピード数え歌」を使って、「単元を貫く言語活動」について考えよう。

単元に入ったばかりのときにはよくわからない。しかし、詩の中の論理を学習して、「これ面白いな」、「みんなで10音の言葉を作ってごらん」と言ってみよう。その結果で、拗音、促音を理解したかが評価できる。

10人集めると、数え歌になる。そこで、「これが連詩というんだよ。」と教えることができる。作品がもつ論理から発展するのが言語活動だ。自然な流れで、子どもが課題意識を持つてくる。

この後になにやったかという、「何かきれいじゃないね・・・」と言う。10になる計算は  $0+10$   $1+9$   $2+8$ ・・・、そうすると綺麗な詩になる。こうすると、一人では無理。付いてこれられない子もいる。高度になるので、4人や5人のグループの方が出しやすい。

こどもたちの作品を紹介する。子どもはテーマを作る。

あ　くるまにひかれそう  
だれ　かってにのらない  
きけん　とびだしちゃだめ  
しんごう　まだあかだよ  
かどまがり　さゆうみて  
ライトつける　よるには

知らないひとに きけん  
しんごういいのは あお  
あかでわたっている あ  
こうつうルールでした

「県百数え歌」というのも作った。少々、無理があるが・・・。

とうきょうオリンピック  
あ さいたますたじあむ  
きた とちぎけんにきた  
いった いばらぎけんに  
りょこうで ぐんまに行く  
よこはまで やきゅうみる  
じっかがある ちばけん  
にいがたけんの おこめ  
やまなしけんさん もも  
しずおかけんさんの ちゃ

見事に作ることができるようになってくるし、創作が楽しくなる。グループでやるからコミュニケーションが生まれる。なにより、詩の意味が理解される。これはおもしろいと思うので、ぜひやってほしい。盛り上がる。この詩の論理を明かしたあとで、一人一人カードに書かせて、貼ってあげると詩になる。

詩の内容にもふれなくてはいけない。「人食い鮫の虫歯」は、怖い中に弱々しい。子どもの中に、「あかさたな はまやらわ」と作った子もいた。「ゆきおんなのしもやけ」(笑)。まさにおもしろい。そういう言葉遊び的なことも要素に入れていくと、ひねって作れるようになり、よりおもしろくなる。

詩には論理が含まれている。その論理を解き明かして、子どもに論理を伝える。それが国語の学力につながる。

### 【詩を読む論理2】

もう一つ紹介する。

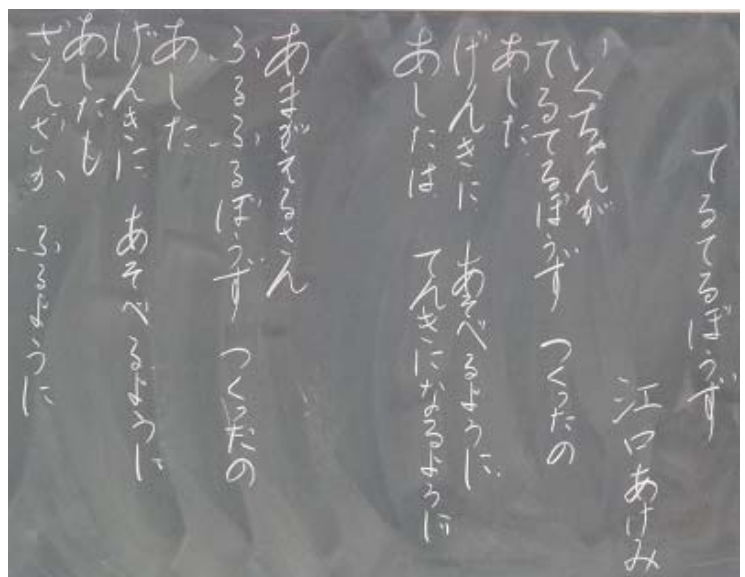
てるてるぼうず

江口あけみ

いくちゃんが

てるてるぼうず つくったの

あした





げんきに あそべるように  
あしたは てんきになるように

あまがえるさん  
ふるふるぼうず つくったの  
あした  
げんきに あそべるように  
あしたも  
ざんざか ふるのように

この詩から、どんなおもしろさ、論理が見えるか？

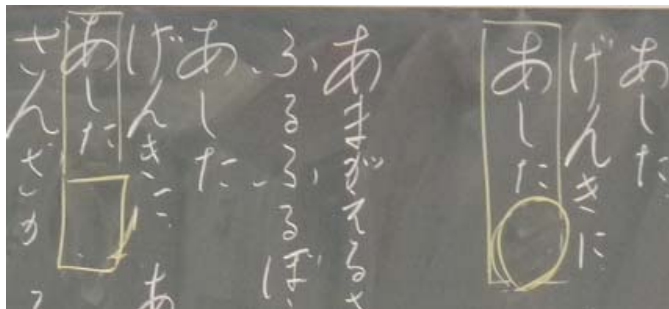
詩を読む観点は、技法。ここでは、連の繰り返しと対比。何と何が対比かを考えると、前は5行で後ろは6行、なぜ違うかが疑問になる。何が見えてくるかという、最後に行替えしてある。

「いくちゃんはなにつくった？」「てるてるぼうず」「なぜ作ったの？」「あまがえるさんは？」「なんで？」

これが、なぞる確認の授業。この後、読んで、視写して終わる。これでは、この詩の論理まで行かない。

発問を変えればよい。

「いくちゃんやあまがえるさんが、てるてるぼうずやふるふるぼうずを作りました。今日の天気は何でしょう」



「あした○」 「あした□」

Q 今日の天気が晴れになるように、今日の天気が曇りになるように、今日の天気が雨になるように、○と□の中に文字を入れてごらん。

こうすると思考活動ができる。「は」と「も」のちがいが明確に見えてくる。なるほど、今日は雨なんだ、いくちゃんは天気になってほしい、あまがえるは雨になってほしいとわかる。授業では、どうしてこの文字？と、理由をつけながら話をしていく。

こうして詩の中の論理を大切に、先ほど言った技法とその効果を読むことが大事だ。

### 【題名から問いを作る】

「この文章は何が書いてあるのか」と内容を推測するには題名が大事になる。

かつては「題名読み」という漠然としたイメージ読みがあった。それに対して、わたしは、題名をそっくりそのまま使う。

「てうてるぼうずって？」という問いの文を作る。その答えは、作品の中にある。

説明文も同じ。光村図書の2年生に「たんぽぽのちえ」がある。「たんぽぽには、どんなちえがあるの？」これで内容が問える。「たんぽぽのちえは、いくつあるの？」こうして、数を問えばよい。したがって、学習課題は「たんぽぽには、どんなちえがいくつあるの」とすればよい。

作品は題名に象徴されている。

文学作品の題名の付け方は3つある

- |                 |
|-----------------|
| 1 登場人物・中心人物     |
| 2 作品の山場を題名にしたもの |
| 3 作品の主題に関するもの   |

だから、題名を問いにすれば、その答えが作品の中にでてくる。

説明文も同じ。

- |                     |
|---------------------|
| 1 題材や話題が題名になったもの    |
| 2 事例が題名になったもの       |
| 3 筆者の主張や要旨が題名になったもの |

何をしたいか分からないときは、まず題名から問いをつくってみてほしい。ポイントは、そのままつかうこと。一部だけだと広がりすぎる。そのまま使うと凝縮される。

### 【日本語のリズム】

今日この会に来た人は、リズムは詩を支えていることが分かっている人だと思う。悩んだら、七五調か五七調かを読み解けばよい。

それでは、どうして、短歌や俳句は、5音・7音なのか。

日本語というのは、2音と3音が様々な組み合わせでできている。これでできるのが、5音や7音。2音+2音を5音にするのは、切れ字や助詞だ。「古池や」は、「や」で5音になる。「かわずとびこむ」は、3音+4音。2音と3音が基本なのである。

「春の七草」が典型だ。

せりなずな ごぎょうはこべら ほとけのぎ すずなすずしろ これで七草

5音、7音だから覚えやすい。五七五七七。見事にリズムを使っている。楽しく覚えることができる。

秋の七草も同じ。

面白いことに、陰暦月十二月も同じ。「うつき きさらぎ やよい・・・」を覚える方法がある。

むきやうさ  
みなふみはずき  
ながかんな  
しもつきしわす  
これぞ ひととせ



これで1年を覚えることができる。日本語のリズムは面白い。

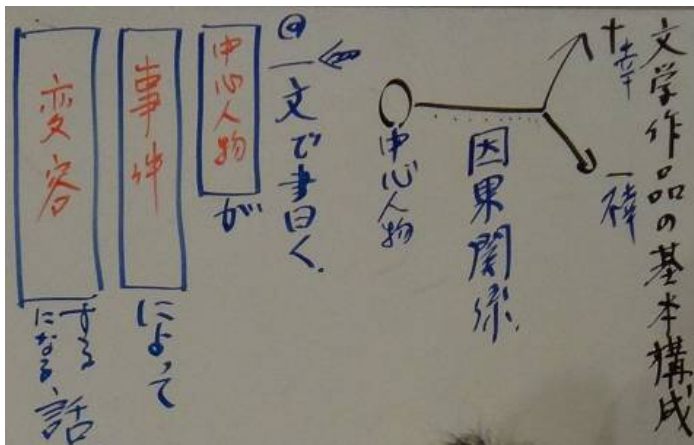
### 【文学作品の基本形】

文学作品・説明文について、基本形がある。

その基本をしっかりと持っていれば、何を読みながら教材研究をすればよいのか、観点が生まれる。

文学作品の基本形はこれだ。文学作品は、これしか書いていない。

中心人物が、いろんな出来事に出会って、幸せになるか、不幸になるか



中心人物がどう変容したか、なぜ変容したかの因果関係を読む。だから、文学作品は、一文で書くことができる。次の文型だ。

**□が□によって□する、□になる話**

これでとらえることができる。

最初の□には、作品の中心人物を入れる。次の□には、変わるきっかけになった事件をいれる。最後の□には、変容を入れる。

どんな長い作品でもこれでよい。ただし、用語が理解されていないから悩むのだ。

光村図書2年生「お手紙」で考えよう。がまくんとかえるくんが出てくるが、あの作品の中心人物はだれか？

がまくんと思う人？（数人）、かえるくんは？（数人）

がまくんが手紙がほしくて、親友のかえるくんが手紙を書く。がまくんが喜び、かえるくんはかたつむりくんにわたした。4日たって、幸せそうに座っている。

大人でも、意見がばらばらになる。それは、中心人物の定義が共通理解されていないからだ。

1年生の「大きなかぶ」で、登場人物の勉強をしなければならない。実は、幼稚園で力を込めて演じており、既に内容を知っている。小学校で何をやるか？より高いレベルの学習が必要なのに、お面をつけて動作化をしている（笑）。だから子どもにとって面白くない。

登場人物が誰というに分かれる。おじいさん・おばあさん・むすめ、犬・猫・ネズミ、全部という人もいる。「犬・猫・ネズミは人間でないからだめ」という意見が出る。そうしたら、スイミーには、登場人物はいないということになる（笑）。

登場人物は、人間のように動いたり考えたりする。そうすると、「かぶは？」という意見が出る。なぜ？と聞くと、「動いているから」（笑）。それは、動いているのではなく、動かされているのだからだめだよと教えてやる。

規定をすれば、どんな作品でも登場人物を選び出せる。中心人物とはだれか、教えておけばよい。

心が一番多く変わった人は？だからがまくん。規定が生きてくる

物語は全てこうなっている。ファンタジーも同じ。現実世界から非現実世界に移り、現実世界に戻る三部構成だ。作品を丸ごとにとらえることが大事。

それなのに、一つの論理の中でできている文章をなぜ場面に分けて気持ちを問うのか。そうすると、子どもたちは、その場面でしか考えない。まず、全体をつかんで、それから細部を読んでいく。

普通は、初発感想を書かせる。そして、学習課題を作る。「ゴンの気持ちを読みとろう」(笑)。

子どもはそんなふうには考えない。そんなふうには読まない。初発の感想は、2度と使われない(笑)。

私は、初発の感想に代えて、これを書かせる。

・・・が・・・によって・・・する、・・・になる話

これを見れば、子どもは中心人物がわかっていないとか、変容が曖昧だとわかる。

これを、学習の最後にもう一回書かせる。

### 【説明文の基本形】

説明文も全文をとらえる必要がある。

低学年の基本形は、「問い」—「答え」の関係だ。1年生に指導するのは、文末表現。「ですか」「でしょう(か)」、答えが、「(から)です」「である」、この関係をとらえる。

おさえなければならぬ用語は、**形式段落、主語、文**。最も大事にするのは、「**文意識**」、「**主語意識**」。これができていれば、中学年に生きてくる。国語も積み上げの教科だ。

「問いの文は何段落か？」2段落にあるとしよう。「2段落はいくつの文でできている？」  
こうして、文意識を育てる。3つあるとすると、「3つの文のどの文が問いか？」

答えも同じ。問いの文を一文書いて、答えの文を一文書いて、「問いと答えが合いますか？」と問えばよい。こういう形式をとらえさせることが、他の説明文にも生きてはたらく。

中学年も、「問い」—「答え」の関係。

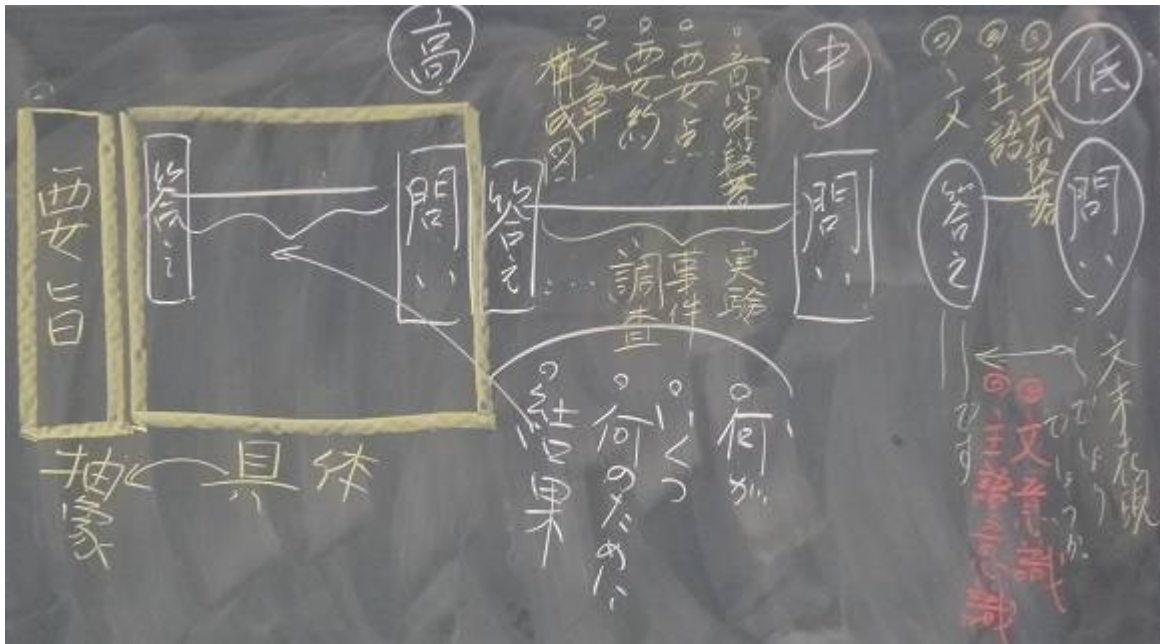
教えることは、**意味段落、要点・要約、文章構成図**。用語が多くなる。

低学年より、「問い」と「答え」の間が広がる。そこに様々な実験や事例や調査があったり、観察があったりする。

それぞれの段落をまとめて意味段落をまとめる。全体の構成をつかむ。**何が、いくつ、何のために、結果**、この4つの視点でこの間を読んでいく。

高学年も「問い」と「答え」。

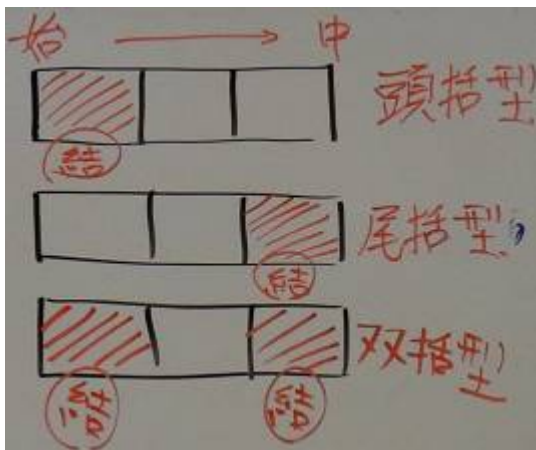
この関係は変わらないが、今までやってきたことが、具体になってくる。そして、新しく、**プラスα**がつく。これが**要旨**。**具体**を、**抽象化**したもの。中学・高校ではこれが長くなっただけだ。



### 【文章の3つの型】

文章には3つのパターンしかないからこれを覚えておけばよい。

文章を「始め」「中」「終わり」に分け、結論が初めにあるのが**頭括型**。低学年の説明文に多い。



結論が「終わり」にあるのが、**尾括型**。中高の説明文に多い。

結論が「始め」と「終わり」にあるのが**双括型**。

この3つでできている。双括型は、中の部が2つに分かれる。前半部分で前の結論の説明をし、後半で新しい情報が入る。プラスαの結論になる。

双括型は前が基本の土俵、後ろが筆者の主張、要旨になる。

結論がどこにあるかで、文章が見えてくる。

このパターンを知ると文章を書くときにも役に立つ。読書感想文も、双括型で書かせればよい。まず「おもしろかった」と書く。次に、その理由を3つ挙げる。最後にまとめを書かせると、それで深まる。

論文も同じ。始めに結論を書いて、最後に新しい主張を書く。

高学年のでは、「要旨」が出てくる。中学年までに具体を読んできたが、高学年では要旨。要旨を理解できないと、中学・高校に入って読めなくなる。文章を丸ごととらえることが大事だ。

形式段落も、多くの場合この方法できている。だから、文意識が大事だ。

「要点」をまとめる方法を教えるにはこの考え方が基本だ。学生に「要点をまとめてごらん」というと、二つの動きをする。形式段落ごとにまとめようとする人、全体をまとめようとする人だ。これは、要点は、何をまとめるのかが分かっていないからだ。

要点：形式段落をまとめるもの
要約：全体をコンパクトにまとめるもの
要旨：筆者の主張をまとめたもの

要点は3つの動きがある。

- |                             |
|-----------------------------|
| ① 形式段落がいくつの文でできているか、文の数を数える |
| ② 大切な一文はどれか取り出す。            |
| ③ 取り出した一文を短くまとめる。           |

しかし、つまりくのは「大切な一文」の見つけ方。これは、結論はどこにあるかでわかる。この文型を知っていれば、要点が出せる。

もう一つ、短くまとめるためにどうするか。体言止めをさせればよい。この分の主語を文末に置かせればよい。

要点をまとめれば、文章構成、意味段落、要約・要旨が見えてくる。要点を求めるためには、文意識、主語意識が大事。

ただ、要点をまとめることは目的ではなく手段である。まとめてとらえるのは、説明文でも文学作品でも同じで、全体をとらえるために、文章や作品を丸ごと読む。

### 【文章の三部構成】

「はじめ—中—終わり」の三部構成をとらえさせる。これが指導の第1段階で、ここから細部にはいる。簡単なように見えるが、なかなかそうはいかない。

配付資料に学習材「むささびのひみつ」（学校図書4上）がある。「はじめ—中—終わり」の区切りに線を引いてほしい。

（各自で取り組む）分かれましたか？隣と比べてほしい。指導書に頼るのはよくない（笑）。

1・2と3の間に線を引いた人が多い。後半は12と13の間が多い。大人がやっても分かれる。

Q どうして2段落で切ったの？ A 「問いの文になっているから。」

そうですね。切りたくなりますよね。

Q なぜ3の段落で切ったの？ A 「投げかけているから」

これでは議論にならない。こういうときは原理・原則を使えばよい。説明文でまとまりを見つげるための原理・原則は、問いと答えを見る。

問いには、3つの役割がある。

- |                |
|----------------|
| 1 文章全体を貫く問い    |
| 2 部分のまとまりを表す問い |
| 3 隠れた問い        |

文章全体を貫く問いは1個。2はまとまりができる。

2段落に「どうして自由に木から木へ飛び移ることができるのか」という問いがある。

1 1段落に、「どうして木の上でくらすのか」と、問いが二つある。

2段落の答えと説明はどこにあるか？3から10段落だ。だから、2段落と3段落から10段落は切り離せない。はじめは、1段落だけ（驚）。

二つ目はどこまでか？

ここで使う約束が、「主語連鎖」。形式段落の主語はものすごく大事。

1 1段落はいい。1 2段落は「何について書いてある？」と聞けばよい。最後に、「だから・・・なったのです」となったのは誰？と聞くと、低い子でも参加できる。

1 3段落の主語は、「むささびにとって・・・必要なのです」と書かれているのでむささび。

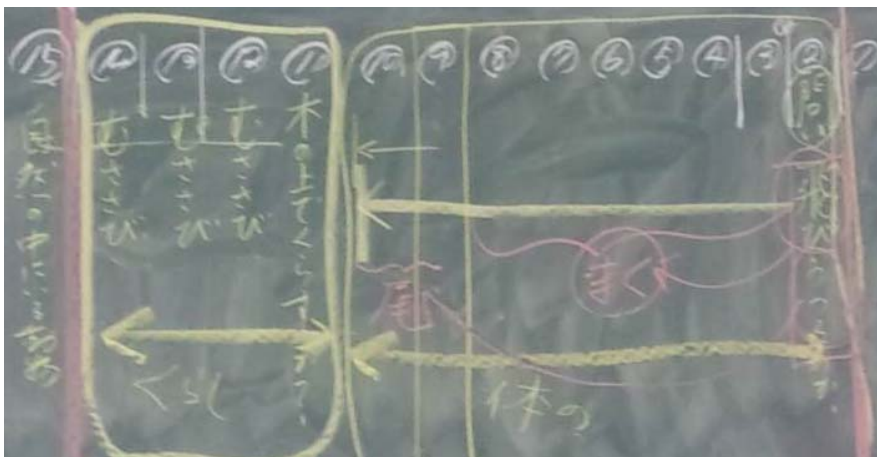
1 4段落もむささび。

1 5段落は、主語が自然の中にいる動物に替わっている。

すなわち、1 4段落と1 5段落の間で切れることが分かる。

「はじめ」は1段落、「中」は2から14段落、「終わり」が15段落。中が2つのまとまりでできていることがわかる。

決まりを使って、まず全体を見、次に中を見る。その中に隠れた問いがある。



9段落には、隠れた問いがある。「しかし、これだけではむささびが木から木へと自由に飛び回るひみつがわかりません。」という文には、「自由に飛び回れるひみつは？」という問いが隠れている。

この解が10段落にある。

文の仕組みを見ると、問いは2段落に「からだのひみつ」、「くらしのひみつ」とあることがわかる。

全体をつかんだら内容を見ていく。この資料は、私が文字だけを打ち直した。なぜなら教科書の図を消すためだ。そうすると「どんな図か描きなさい」と描かせれば、文章を読みとれたかどうか分かる。

国語の授業とは、論理でできている。その論理を見つけだして、授業に位置づけていかなければならない。そうすれば、同じ発問をしなくてもよい。高学年の物語は長いので、場面ごとに同じ発問をしていると、子どもは飽きて早くその単元を終わりたいと思う（笑）。

毎時間のように、「今日は、第〇場面の・・・の気持ちを考えてみましょう」と聞いている。それは読書活動であり、国語の授業では、読む力を付けなければならない。どんな読みの力を付けるのか。教材のおもしろさに目をつけさせたい。

2時間があっという間に過ぎた。しっかり聴いていただきありがとう。